ゆい
2024年夏　第9号

ブックトークのこと、そして父の思い出

5月12日のブックトークでは、『僕が家庭科教師になったわけ つまるところの「生きる力」』をとり上げて、著者の小平陽一さんにお話を伺いました。この本はパートナーさんとの共働きの中で、男性が家事育児に悪戦苦闘する内容で、言わば 1970～1980 年代のイクメン、カジダンの奮闘記です。小平さんはこの経験のあと、理科教師から家庭科教師にシフトチェンジされます。楽しく読めて、家族のこと、ジェンダーのことをいろいろ考えさせられ、また学べる一冊です。

参加者の中には、今まさに夫や息子に不満爆発の人もいれば、既に夫を見送りシングルとなった方もいました。先立たれてみると、何も家事をやらないと思っていた夫は、庭の草むしり、庭木の枝切、家電の取り付け等、ちゃんと家事参加できていたのだとわかったとのこと。夫に任せていたことを、今一人でやらねばならないのがとても大変だそうです。シングルの先輩からは、くよくよ考えないで、楽しいことだけ考えようとアドバイスが出たりしました。

会が終わって、三々五々の帰り道、「父親の認知症が始まった」という方とおしゃべりをしました。「ペットのネコのためにも父親に頑張ってほしい」とのことでした。「ペットも家族」最近はそう考える人が多く、家族の範囲も変化していることを、小平さんのお話の中で教えてもらったばかりです。私はふと、自分の父親のことを思い出しました。父にも仲良しのペットがいました。九官鳥の「キュウちゃん」です。毎朝、水浴びをさせ、餌を与え、言葉を教える。父はキュウちゃんと共に、そんなルーティンを10年以上続けていました。キュウちゃんはたくさんの言葉を覚え、父の独り言まで繰り返すのが、とても愉快でかわいかったです。でもある日、父はキュウちゃんの世話をしなくなりました。認知症の始まりでした。給餌は家族が続けたものの、それから1月ほど経って、止まり木からバサッと落ちているキュウちゃんを見つけました。もう十分生きて、寿命だったんだと思います。けれども、ずっと共に暮らした父を見失って、一気に生きる力をなくしてしまったのではないかと思うと悲しかったです。父はものすごくわがままで、家族にとっては困った人だったのですが、九官鳥のキュウちゃんにとっては、なくてはならない相棒、かけがえのない家族だったのだろうと思います。

小平さんや参加者の方々のお話を聞いて、家族のことをたくさん考えた一日でした。そして「父親とペット」という話題は、私の記憶の扉をノックしてくれました。10数年前のことが鮮やかによみがえってきて、その夜は、しばし父の思い出にふけりました。そしてキュウちゃんの思い出にも・・・。

（Kナカノ）

『存在しない女たち　男性優位の世界にひそむ見せかけのファクトを暴く』

キャロライン・クリアド＝ペレス著
神崎　朗子訳
河出書房新社
（2020 年）

ニュースで、女子サッカー選手の膝のケガの多さは、実は男性仕様の靴に大きな原因があるという研究がなされていることを知った。以前は女性の体形がサッカーに向いていないのではと言われていた。あんまりではないか。

本書は、この世は男性が標準人として幅を利かせていると述べる。車の運転席の仕様、薬の効き目、ペースメーカー植え込みの基準値、化学物質への暴露、放射線量の安全値、街の設計、避難所の構造…、命に関わることが、男性を中心に設計・測定されており、50％を占める女性の生活・行動、身体特徴、ホルモンの影響などほとんど考慮されていない。動物・人体・細胞実験レベルでも、雌性と雄性では異なる（時に逆の）性質があるにも関わらず。その中で女性は死亡させられている。なぜ、女性を性的対象物とした画像データ（人権侵害）は溢れているのに、肝心なものに関しては男性優位に偏っているのか。

日常生活でも、災害でも、経済でも政治でも、女性は命の危険と故意に隣りあわせだ。「経済成長」のため「男性のようであること」「白人男性富裕層の利益のために犠牲になること」を要求され、働けばあらゆる攻撃に晒されるのもその一つだ。

重要なのは、男性優位の仕組みを変えることであり、女性の声をもっと訊くことであり、女性の存在を常に忘れないことだ。

圧倒的なデータで、男性中心社会がささやく“見せかけの「問題のない社会」”を切り崩す本書に励まされる。自分の心や体から物事を見るべきなのだ。“私”がおかしいと感じたことにはデータに基づいた理由がある。　（野田）

『<共働き・共育て>世代の本音　新しいキャリア観が社会を変える』

本道敦子　山谷真名
和田みゆき
光文社新書
（2024 年）

私は就職したことがありません。57歳の時初めて契約書にサインしてアルバイトをしたことがあります。事務仕事で組織の中で働く大変さを知りました。女性が仕事をして家事もする大変さはわかったのですが、なぜこうなっているのか理解できずに長年モヤモヤしていてこの本を知りました。

「前書き:ミレニアム世代の共働きと共育て」では会社社会の古いしきたり、家事・子育ては女性がやるべきという考えを変えている男女の体験談やデータが図で表されていて分かりやすいです。「第1章:子育てしながら夫婦で働くこと」は夫婦の問題、「第2章:夫の場合男性のプライベートロス」「第3章:妻の場合　女性のキャリアロス」は男女の問題を別々に書かれています。この後も「夫婦の場合」「企業の場合」と続いていきます。

当事者にアンケートをして意見を聞き、インタビューもして、その中で悩み、苦労したこと、上司に励まされたことなどもありのまま書いてあります。問題をどのように解決したかなど悩んでいる人たちの助けになると思います。若い人だけでなく子育てを終えた方にも読んでもらいたい、特に企業の方には是非読んでほしいと思っています。

最後の「解説:<共働き・共育て>が当たり前の社会を実現するために　佐藤博樹（東京大学名誉教授）」では、夫婦がお互いを認め合い話し合う共働き・共育て実現のためこれからも様々な調査を続け問題解決していくと話されています。当事者たちと協力者たちを巻き込み社会を変えてきていることを感じました。私も共働き・共育てが当たり前の世の中になるように応援できたらと感じた一冊です。

（あや）

『母が重くてたまらない
墓守娘の嘆き』

信田さよ子
春秋社
（2008 年）

「親子」、だからこそ改めて良い関係を築くことは難しいのだろうか。

本書に書かれている「墓守娘」と「重すぎる母」の事例の数々は自分にもお隣にも起こりそうな、そしてごく普通の関係に見える部分もあるように思う。

「やりたいことをやるのが人生」と言った母の、同じ口から「いつになったら結婚するの？」「私たちが死んだら墓守は頼んだわよ」といった言葉が発せられる。中学受験を母娘の二人三脚で乗り越えるまではよかったが進む大学を指南し、就職偏差値の高い企業案内を娘に提示する。これらは部下のように家族を扱う夫への不満も原因と考えられ、母は娘を運命共同体へと引きずりこみ、母親の寿命が延びたこと、高学歴化により娘の結婚年齢が上がったこと、母親に経済的豊かさがあること、非正規雇用の人口が増大し経済的に娘が不安定であること、少子化により一人娘が増えたことなどの社会的条件の変化により息子ではなく娘が母親の依存対象となったと著者はいう。

また、暴力と憎しみによって結ばれる母娘の事例も示されている。暴力を用いて離れられない状態にするのは男女の関係だけではないのだ。

娘の人生と娘自身をコントロールしようとする母と、そんな母に気付き、離れたいと思っても捨てることも離れることもできない娘は異様な絆で結ばれる。そこに父親の存在は、ない。

子どもに問題が起きたときにカウンセリングにやってくる父親は 12%ほどだという。

世間の目が母親の責任を問う状態はいつまで続くのだろうか。（佐藤）

『対岸の家事』

朱野　帰子
（アケノ　カエルコ）
講談社
（2018 年）

今、専業主婦って絶滅危惧種なの？

共働き世帯の増加で専業主婦世帯は夫婦のいる勤労者世帯の 3 割にまで減少している。（総務省「労働力調査」）また、未婚者や高齢単身者の増加によって単身世帯は総世帯の約 3 割を占めるという。（厚生労働省「令和 4 年国民生活基礎調査」）

主な登場人物は、次の 5 人。詩穂、27 歳の専業主婦。ママ友を見つけられず、常に娘と二人きり。礼子、35 歳、3 歳の息子と生後半年の娘を抱える多忙なワーキングマザー。夫も忙しく家事を手伝うことはない。達也、30 歳、外資系企業に勤める妻に代わり、1 歳の娘のために 2 年間の育休をとった。晶子、26 歳元保育士、小児科医の夫と結婚し、受付を手伝っている。なかなか子どもができない。坂上さん、70 歳の専業主婦、一人暮らし。仕事に邁進する 40 歳の娘を心配している。

登場人物がどのように絡み合って物語が進むのか、彼女たちをとりまく社会をどう描くのか、作者の思いと読み手の興味関心でいろいろな風に受け取れると思う。物語の展開には、突っ込みを入れたくなるが、登場人物に思いの丈を語らせるには小説は1つの手段だと思った。

それにしても、所得の格差、生活の質、保育所入所、ワンオペ育児や家事、高齢者の単身生活、女性の働き方や女性活躍、これでもかとふりそそぐ困難さは、決して「対岸の火事」ではないと気づかされる。

2021 年に文庫版も発行され、「アナザーサイドストーリー虎朗篇」（虎朗は詩穂の夫）が限定付録としてついている。（礒部）

2024 年度公募型共催事業

第 28 回「ブックトーク＆井戸端会議」　さいたま市女性学研究会（ゆい）主催

2024 年 9 月 1 日（日） 14:00～16:00 パートナーシップさいたま 第 3 会議室 定員 24 名

「今、専業主婦って絶滅危惧種なの？」 あなたは、この問いかけにどう答えますか？

『対岸の家事』朱野（あけの） 帰子（かえるこ） 講談社 単行本（2018 年） 文庫本（2021 年）

〈講談社文庫〉

『わたし、定時で帰ります。』の著者が描く、もう一つの長時間労働。家族の為に「家事をすること」を仕事に選んだ詩穂。幸せなはずなのに、自分の選択が正しかったのか迷う彼女のまわりには、性別や立場が違っても、同じく現実に苦しむ人たちがいた。誰にも頼れず、限界を迎える彼らに、詩穂は優しく寄り添い、自分にできることを考え始める――。終わりのない「仕事」と戦う人たちをめぐる、優しさと元気にあふれた傑作長編！

（講談社 BOOK 倶楽部 作品紹介より）

参加ご希望、お問い合わせは、さいたま市女性学研究会事務局までご連絡ください。参加費 200 円。

事務局〈礒部（礒部）〉 電話：048-641-3765 E メール： i.sachie@nifty.com

💻パートナーシップさいたま耳寄り情報📰

性暴力防止セミナー「性的同意について考えよう」（オンデマンド配信講座・参加費無料）

内容：つきあっていれば何をしてもOK！？
対等な関係について大人も子どもも一緒に考えてみませんか？
「性」は「生」の根源に関わることです。子どもたちが自分や関わる誰かの尊厳を守り、健康で幸福な人生を送るために、大人にも知ってほしいことなどをお話いただきます。

講師：櫻井裕子さん
・プロフィール
助産師、思春期保健相談士、思春期学会性教育認定講師、看護専門学校・助産専門学校非常勤講師
助産院開業。自身の妊娠・出産を機に助産師を目指す。現在は、地域母子保健事業や看護専門学校非常勤講師を務めると共に、小～大学生・保護者に向け、性に関する講演を年間１００回以上実施。
また、思春期の子どもたちからの相談も多数受けている。

配信期間：令和６年８月１日（木）～３１日（土）
申込期間：令和６年７月５日（金）～８月１８日（日）
詳細及びお申込みはホームページから
https://www.city.saitama.lg.jp/006/010/002/004/p114712.html

「ゆい」2024 年夏号 第 9 号 （2024 年 7 月 1 日発行）
編集 さいたま市女性学研究会（ゆい） マーク、題字 野田
＜事務局＞礒部幸江 電話 048-641-3765 Eメール i.sachie@nifty.com
発行 さいたま市男女共同参画推進センター｜パートナーシップさいたま
〒330-0854 さいたま市大宮区桜木町1丁目10－1 シーノ大宮センタープラザ3F
電話：048-642-8107 FAX：048-643-5801
https://www.city.saitama.lg.jp/006/010/002/index.html